

専攻建築士紹介



大成建設

杉本 賢司

〔棟梁専攻〕

歴史を学び素材を活かす

専攻建築士棟梁には幅広い勉強が求められる。素材については、樹木は山林で成長しているときの水分は55%、伐採されたあとに自然乾燥されたときには30%、建築用部材として強制乾燥させると13%の水分になる。檜を社寺で採用するには意味がある。檜は杉の年輪と同じ断面にまで成長するまでに3倍の時間を要する。檜が乾燥しても狂いが少ないのは、この緻密な年輪の効果によるもので、木材に含まれるヒノキチオールという忌避成分によって害虫を排除することができる。台所の床に檜をつかうとゴキブリがこないのは忌避効果による。したがって、1000年を経過しても良好な環境下では強度は4%しか低下しない檜は究極材料だ。

棟梁の資格には他の専攻建築士と異なり、こうした木材の知識や保存技術などを後世に継ぐことが最重要テーマとして課せられている。「つくり・守り・繋ぐ」ことが棟梁の社会的な責任である。これを受けて、一人でも多くの人に伝統建築と新しい保存技術を学んでもらうために、住職さんの専門誌である「寺門興隆」では建物の維持管理についてはや55回の連載をしている。3人に一人の住職さんが読んでおられる実務に連結した内容に絞ったものだ。建築分野では、「GA」素材特集、「ディテール」では世界遺産の建築の詳細について連載を続けている。建物をつくる側だけでなく、お寺を守る人たちにも理解をしてもらいたいいつも思っているからだ。日本の巨木は東大寺の創建のときにほぼ使い果たしてしまった。本堂でつかう巨大な梁や柱を確保するために台湾ではもう手に入らずラオスの奥地まで求めている。これからは世界的な自然保護を考えると無垢材にこだわるよりは、集成材に切り替えて表面に突き板を貼る方向にすることも大きな英断ではないだろうか。

棟梁は、歴史についても知識が求められる。世界遺産である厳島神社では、祇殿から大鳥居まで108間の距離があること、石燈籠、吊り灯籠の数まで108。これはアンコールワットの石柱数とも同じでヒンドゥー教の数字に関連する。そのほか紫禁城の壁が赤く、屋根がなぜ黄色なのか、皇帝の玉座の位置を中心にして北京がつくられた理由はなにか、紫禁城の補修にFRPはどうやってつかっているかなど、新旧を含めた維持管理技術の習得がもてめられている。日本の補修や耐震技術はアヤソフィアやアンコールワットのユネスコ活動にも貢献しており、国際支援も強く求められている。棟梁は地道で責任の大きな仕事で、いつまでも終わりのない技術と文化を学ぶ分野である。